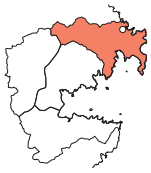
隔絶された場所で①

船を沖出ししたものの　～歌津地区 港～



▲津波の直後、漂流する船を瓦礫が取り囲む。（志津川湾内）　写真提供　南三陸町社会福祉協議会

国道 45 号を気仙沼方面に北上した町境近くにある港は、外洋から入る波を遮るような深い入り江になっており、まさに天然の良港だ。普段は沖に白波が立っていても、港は別世界のように穏やかだ。

漁師たちの間では、津波から船を守る手段として、潮位の変化が始まる前に、津波の影響が少ない沖合まで船を出す「沖出し」が行われてきた。東日本大震災のその日も、漁師の及川征記さんと阿部克樹さんは、激しく潮が引く中、入り江をギリギリで脱出し、津波の巨大なうねりをなんとかかわしながら、必死で船を沖出しした。

しかし、しばらくすると、沖には家の屋根やらガスボンベなど、様々なものが流れてきて身動きできないまま、夜になってしまった。及川さんたちは仲間たちと４艘の船を、大破した養殖施設の残骸に係留し、次々と流れてくる漂流物が船にぶつからないように押しやりながら、ひたすら夜が明けるのを待った。常に転覆する危険と隣り合わせの恐怖の中で、ひとときも心休まることはなかった。時折、発電機を回しライトで周囲を照らし出すと、１時間毎に同じ家の屋根が流れてくるのが確認できた。瓦礫混じりの濁流が、恐ろしい勢いで大きな渦を巻いていた。

船の沖出しはいかに危険を伴うことなのかを二人は身をもって体験した。「大きな津波の時には沖出しはすべきではない。船より、自分の命を守る行動が何より大切だ」と、死と隣り合わせの一夜を経験した二人は語っている。

隔絶された場所で②

ＳＯＳを伝えたいのに…　～公立志津川病院で～

▲2011（平成 23）年 3 月 12 日　病院の屋上に自衛隊のヘリコプターが降り立ち、 患者たちの救助が始まった。

公立志津川病院には 300 人を超える人々が孤立した。かろうじて浸水を免れた新館 5 階の会議室で、入院患者と職員、そして地域住民が、繰り返す津波と余震の恐怖に耐えていた。

津波によって携帯電話のアンテナなどが壊滅したため、電話も不通となった。海岸部の橋も全壊し、陸の孤島となった。

当時の横山孝明事務局長は、非常時用の衛星電話で県内の消防署や県庁に何度も電話したが、話し中で全くつながらなかった。そこで、県外に知り合いのいる職員から番号を聞いて、なんとか救助を求めようと電話し続けた。唯一つながったのは、はるか遠方の医師会だった。南三陸町の現状を伝えてくれと依頼したが、頼みの綱の衛星電話も 19 時には充電がなくなって使えなくなってしまった。救助を求める術は、それで完全になくなった。

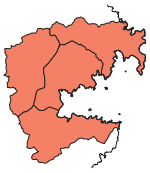
▲2011（平成 23）年 3 月 18 日撮影の
公立志津川病院周辺。

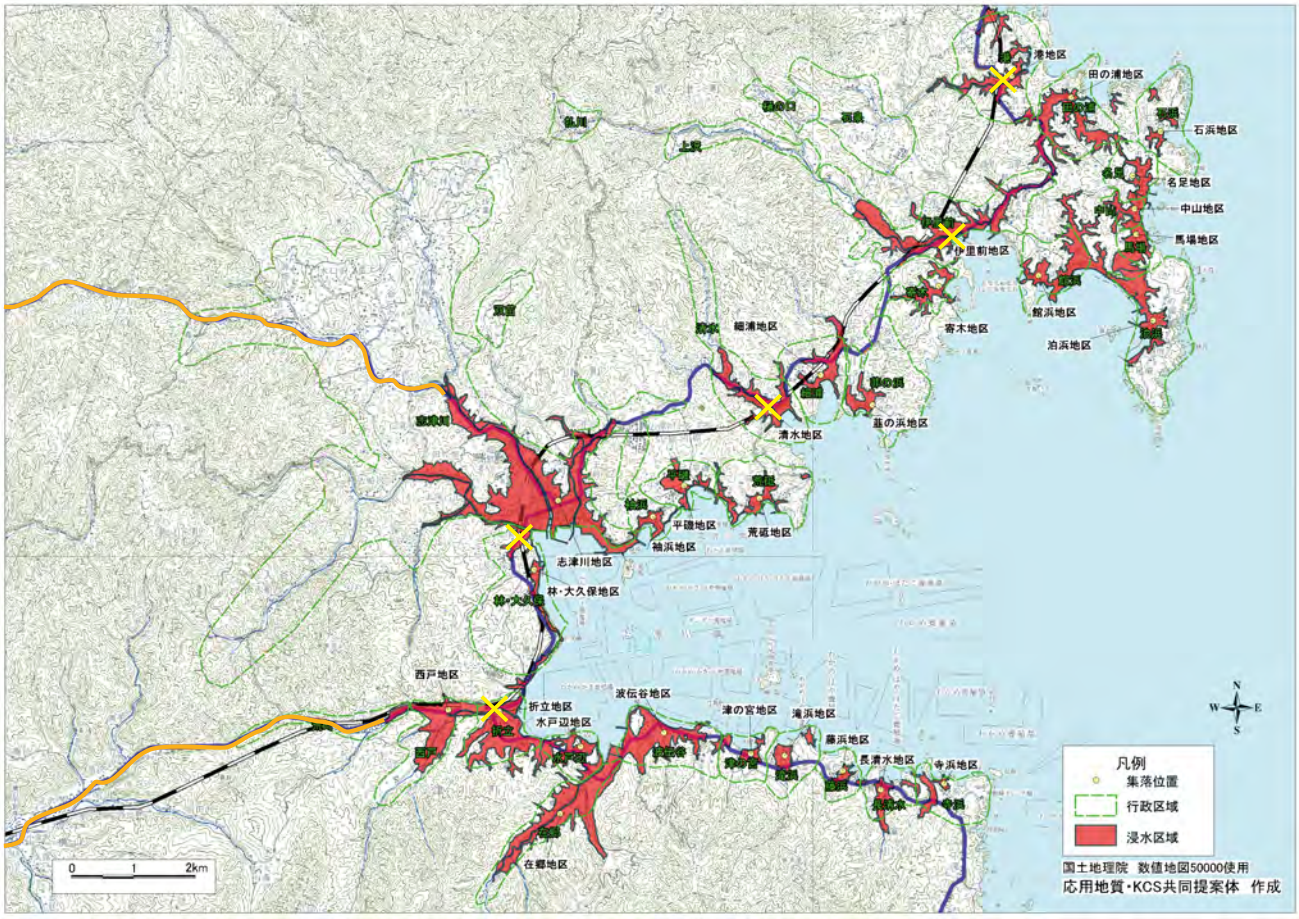
大災害時に、救援要請をスムーズにするためには、遠方に緊急時のネットワークを築いておくことが大切だ。

救助のヘリコプターが来たのは翌朝。全員の救助が完了したのは被災から 2 日後の 3 月 13 日だった。

隔絶された場所で③

橋と沿岸道路の壊滅　命をつないだ生活道路





▲黄色の × 印は橋が陥落した主な場所。オレンジの線が、当時物流・移動の幹線となった内陸の道路。
特に山中の細い生活道路が大活躍した。

津波で沿岸部の橋のすべてが破壊され、幹線道路の国道 45 号はいたる所で寸断された。町外から被災エリアにアクセスできる道は、内陸から海岸へ抜ける国道 398 号のみとなった。

特に半島部は、津波で道路という道路が破壊されたため、何週間も孤立することになった。支援物資が届かないため、自分たちで食料を調達しなければならない状況が続いた集落では、瓦礫の中で見つかった缶詰や未開封のお菓子など、食べられる物を集めて、食事を補い命をつないだ。

▲歌津地区伊里前の国道 45 号の橋は津波で全壊した。
写真提供　陸上自衛隊北部方面隊

また、行方不明の家族を捜す人たちは、遺体安置所になっているベイサイドアリーナや学校などの施設に行こうとしても、車が通れないため、自分の足で山道を歩いた。

町内を行き来できる道は閉ざされてしまったが、その厳しい状況下で役立ったのは、地元の人もあまり通らなくなっていた山間の住民たちの生活道路であり、この道が住民たちの命をつないだのである。

隔絶された場所で④

情報が届かない 情報が伝わらない ～災害対策本部～

▲鉄道の高架も瓦礫で埋め尽くされていた。

写真提供　南三陸町社会福祉協議会

「震災直後は町民１万人と連絡が取れない」と報道され、住民は家族や知人の安否がどうなっているか不安でいっぱいだった。必要な情報が全く得られず、入ってくるのは誰かの携帯ラジオから流れる県内外の被災情報だけだった。

電話、携帯電話、インターネットなどの通信インフラは、アンテナやケーブルの破壊により全く使えない状態に陥った。

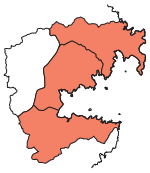
災害対策本部に届く情報は、通常なら車で数分のはずのところから瓦礫を乗り越えて歩いてきた人が伝えに来る数時間前の情報だった。

児童の送迎バスが無事だったとか、住民がいたるところで食料もなく孤立しているが、力を合わせて何とか凌いでいるという情報が災害対策本部に届くと、職員たちはほっと胸をなでおろした。

思うように被災状況の情報が収集できないだけでなく、物資を調達することも、指示を伝えることも、窮状を訴えることもできなかった。生き残った命を守るためのあらゆる手段が失われていた。

隔絶された場所で⑤

自分がやらないで誰がやる　～建設会社の社員たち～



▲震災翌日から地元の建設会社の重機が瓦礫の町で稼働し続けた。　写真提供　阿部藤建設

瓦礫と化した町で、即座に動き出したのは地元の建設会社の社員たちだった。建設会社の多くが被災した中で、社員たちは誰の指示を受けることもなく、無傷で高台に残った重機を出動させた。

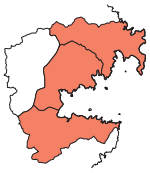
間もなく到着するであろう緊急車両や救援車両が通れるように一刻も早く道を作らないと、助かる命も助けられなくなってしまう。自分の家族の安否すらわからないまま、作業に取り組んだ社員もいた。

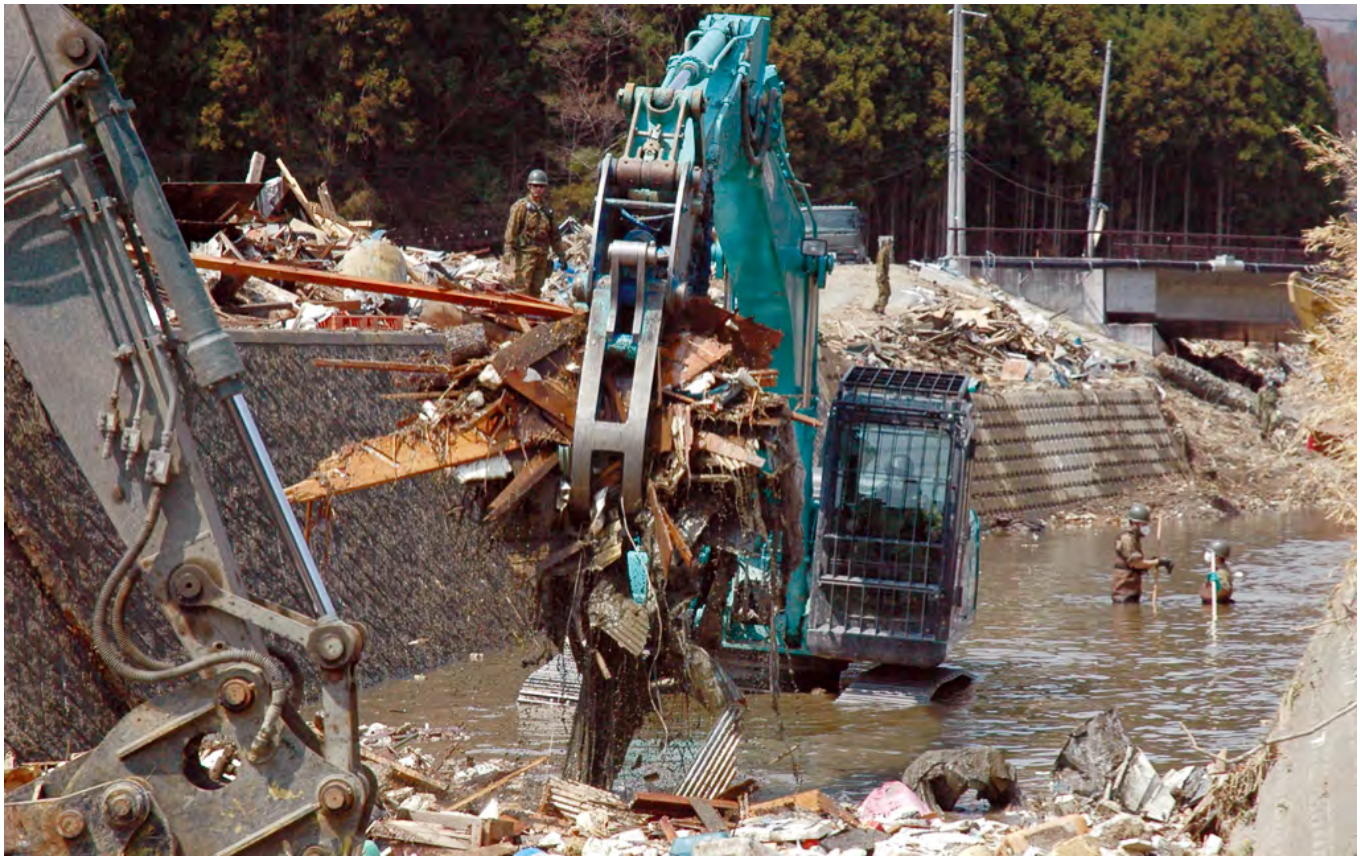
津波で壊れた建物等の残骸で塞がれた道路を開く作業経験はない。もしかしたら瓦礫の下に誰かが倒れているかもしれず、細心の注意が必要だった。しかし、「自分がやらないで誰がやる」。突き動かすのは、プロとしての意地と使命感だった。

地元の建設会社は日頃から、町内の道路や河川等の建設や保守に関わっていることから、これらのインフラを災害から守るのは、縁の下の力持ちとしての自分たちの責任と考えていた。建設会社の人々は、『地域インフラの町医者』を自称している。彼らは最前線で動き続けた。

隔絶された場所で⑥

我々にはできることがある　～地元の建設会社～





▲2011（平成 23）年 4 月 26 日 志津川地区田尻畑での行方不明者捜索。　写真提供　陸上自衛隊北部方面隊

地元の建設会社は、社屋や社員の自宅の多くが被災した。しかし、流失を免れた重機もあった。今こそ、やれることをやろうと、震災から 1 週間後、高台にあった一社に、建設会社の幹部たちが集合し、対策本部を立ち上げた。

動かせる重機を持っている会社が 12～13 社ある。 3 班に分かれて作業を進める計画を立てた。燃料がない。職人も足りない。毎日生じる様々な問題をオール南三陸で乗り越えた。

特に自衛隊との連携作業はうまくいった。当初は、自衛隊の行方不明者捜索が終わったエリアで、地元の建設会社が瓦礫撤去を行う手順を取っていたが、二度手間になることから、瓦礫撤去と同時に行方不明者の捜索を行うことにした。こうして遺体の発見と収容を早めることができた。少しでも早く帰ってきてほしいと願う遺族の思いに応えたいと、現場での連携が進んだ。

これをきっかけに自衛隊との信頼関係が育まれ、その後の復旧作業においても、地元の建設会社は力を合わせて大活躍した。

隔絶された場所で⑦

家族を捜して　「どこにいるの？ 早く帰ってきて」

▲ベイサイドアリーナの玄関に貼り出されている遺体の安置情報を祈るような気持ちで見つめる住民たちがいた。

写真提供　南三陸町社会福祉協議会

あの日、いつものように家を出たきり会えなくなった家族が、今もどこかで生きているのではないだろうか。家族たちは一縷の望みを胸に、来る日も来る日も避難所を捜し回った。

志津川地区のベイサイドアリーナ内にある文化交流ホールは遺体安置所となり、連日、家族を捜す人々が訪れた。全国から駆けつけた消防、警察、自衛隊によって、収容された遺体の発見場所や特徴などの情報が建物の入口に貼り出された。生きていてほしいと願いつつ、その貼り紙を食い入るように見つめる住民たちの姿があった。

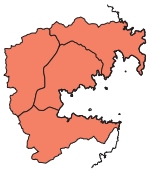
遺体の名簿に家族の名前を見つけた人々に深い悲しみがにじむ。「帰ってきてくれてよかった」と誰かがつぶやく。行方不明の家族を捜し続け、待ち続ける苦しさは、遺族にしかわからない。

今もなお 210 人の住民が行方不明となっている。

隔絶された場所で⑧

住民の声に耳を傾けて

ライフラインが途絶した町を支えた支援



▲2011（平成 23）年 3 月 20 日山形からの給水支援。この頃になると全国各地から支援物資が届き始め、炊き出し支援なども行われるようになった。

写真提供　南三陸町社会福祉協議会

当初 1 万人に近い住民が避難生活を送っていた南三陸町では、町長がメディアを通じて食糧支援を訴えたことから、全国各地からたくさんの水や食料が送られ、また多数の炊き出し支援をいただいた。

当初は、内陸の住民が作ってくれたおにぎり 1 個を分け合い、温かいものをしばらく食べられなかった住民たちにとって、ボランティアの炊き出しは、忘れられない味となった。

また、水道が復旧するまでの間、隣接する登米市が水を提供してくれ、全国各地の自治体が給水車の運行を支援してくれた。民間団体、企業、そして全国、全世界の人々から寄せられた食料や生活用品などの救援物資は、続々と各避難所に届けられた。

また、2011（平成 23）年 4 月に入ると各避難所には被災した住民たちの心と体を癒そうと、さらに多様なボランティア支援が町内各所で展開された。マッサージや足湯、散髪、お茶飲みの場づくりなどのボランティアが訪れ、いずれも、住民たちの話に耳を傾ける活動だった。

隔絶された場所で⑨

人々の命を支えた山の湧き水 ～入谷地区 稲荷林～

▲入谷地区童子下字大羅に昔からこんこんと湧き続ける稲荷林の清水。
震災直後から約１カ月間、通常の３倍の水量が湧出し、断水で水に不自由していた住民たちを支え続けた。

写真提供　南三陸町社観光協会

内陸の入谷地区は深い山からの湧き水に恵まれてきた。そのひとつ、童子下字大羅（どうじしたあざだいら）の集落の奥に、稲荷林（いなりばやし）と呼ばれて来た湧き水があり、古くから地域住民に守られてきた。

長い間断水が続き、すべての水道が復旧したのは 2011（平成 23）年８月だった。住民たちが水に困っていたその期間、稲荷林の湧き水では不思議なことが起こった。同年３月 11 日の大地震で、通常の３倍もの大量の水が湧き出るようになったのだ。大羅の人々は、その水を避難所などに供給し続けた。家屋の流失を逃れた高台の家々の住民たちも続々と水を汲みにやって来た。

自衛隊などの支援により給水態勢がほぼ整った同年４月７日の夜、激しい余震が起こった。その余震をきっかけに、稲荷林の湧き水は、何事もなかったかのように以前の水量に戻った。

住民たちを救った命の水は、今も静かに湧き続けている。

隔絶された場所で⑩

はるかな距離を越えて　翌朝から始まった救助活動

▲大津波から一夜が明けた志津川地区で生存者を捜索する京都市消防局の緊急消防援助隊　　写真提供　京都市消防局総務課

南三陸町の沿岸部は大津波で何もかも破壊された。昇ってきた太陽の光に照らし出された無残に変わり果てた町の光景。住民たちにとって、それはまるで見知らぬ土地のようだった。

翌朝明るくなった頃、消防隊のユニフォームに身を包んで生存者を捜索する一団が、瓦礫をかき分けていた。県内の消防隊、そして京都市などのはるか遠方から駆けつけた緊急消防援助隊である。地震でひびや段差ができた危険な道のりを夜通しひた走って南三陸町に入り、大津波警報が発出される中、瓦礫に埋もれた生存者を捜索していた。

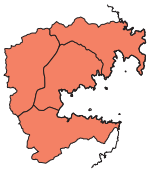
自らも救助に向かった町役場職員は目を疑った。「1,000 kmの距離を寝ずに駆け付けてくれたのか」涙があふれた。

彼らは長距離の悪路を移動した疲れを見せることもなく、危険な状況下で精力的に生存者捜索と救助活動を続けた。

国内の消防援助隊は、京都府、鳥取県、兵庫県、秋田県を含む 4 府県から 508 隊、1,939 人が南三陸町に派遣され、海外からの救助隊も続々と到着して行方不明者の捜索活動が続けられた。

隔絶された場所で⑪

火葬ができない　弔うこともままならず



▲町内の墓地から海を臨む。震災前は建ち並ぶ建物の向こうに海が見えていた。今は海が近く見える。

捜索隊の手で発見された遺体が、次々とベイサイドアリーナ文化交流ホールに運び込まれた。おびただしい数の亡骸がホールに横たわる光景は、それが現実であるとは受け入れがたいものだった。

震災直後、宮城県には「遺体を安置する場所がない」「棺が足りない」などという沿岸自治体からの連絡が相次いだ。県内 27 カ所の火葬場のうち 7 カ所は被災するなどして稼動できず、宮城県の火葬能力は燃料不足もあって通常の 4 分の 1 程度に落ち込んだ。1 日 50 体程度の火葬しかできず、遺体の数に追いつかなかった。

2011（平成 23）年 3 月 13 日の新聞で、「南三陸町 1 万人不通」と大きく報道されたことを受け、宮城県からは町長に「まずは 1,000 体分の棺を送ります」と連絡が入った。犠牲者の数がまだ見通せない中で、町長は「当町では一体何人の被害が出るというのだろう」とその数から被害の大きさを想像したという。

被災各地で棺が不足する中、当町には棺の材料がトラックに山積みになって届いた。被災した住民たちがそれを荷下ろしし、ひとつひとつ組み立てた。

町の火葬場も停電で稼動できなかった。引き渡された遺体を火葬することもできず、遺族は途方に暮れた。近隣自治体の火葬場も順番が来るまでには時間がかかりすぎる状況だったため、山形県など、遠く県外で火葬する遺族も多くいた。仮埋葬の土葬を余儀なくされた被災自治体もあった中、南三陸町では仮埋葬という事態に至らずに済んだ。

しかし葬儀も行えず、火葬される棺をわずかに集まった身内で、寂しく見送るよりほかはなかった。

そして、今も行方不明の家族の帰りを待ち続ける人たちもいる。ある家では、あの日を最後に会えないままの家族の葬儀を行い、墓に名前を刻んだという。新たに名前を刻んだ墓に、何も埋葬するものがないという遺族の悲しみは察するにあまりある。